

日展ニュース

No. 188

<https://www.nitten.or.jp/>

令和6年9月30日発行

編集兼発行人 神戸峰男

第11回日展に向けて



無鉛釉薬「王鳥の如く」
武腰敏昭





「第十一回日展を開催するにあたって」

日展理事長 宮田 亮平

この度、第十一回日展を迎えることはとても意義深いことだと存じております。

一月一日の能登半島地震で被災された方々にお見舞い申し上げます。そして、世界に目を向けると混沌とした状態になっております。一日も早く終息に向かつてほしいものであります。

そのような時こそ文化の力、藝術の力、そして美術の力が人々の心の支えとなり生きる原動力となってくれるのではないかと思っております。そしてその

「力」は「ときめき」となって明日へ生きる「力」となるのではないでしょうか。

一一七年途切れることなく継続され世に問い続けてきた日展の業績は諸先輩方の力と思っております。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の五科の作家の方々の渾身の作品によって、必ずや感心や感動そして共鳴を呼び起こしてくれる会場となると信じております。

どうか皆様の温かいご理解と深いご支援を賜ります様お願い申し上げます。

第11回日本美術展覧会実施内容

会期 令和6年11月1日(金)～令和6年11月24日(日)
 観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
 休館日 毎週火曜日
 入場料 ○当日券 一般 一、四〇〇円
 (税込)

○団体券(予約制)・前売券 一般 一、二〇〇円
 ※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。

小・中学生は無料。
 (ただし、入口で学生証のご提示をしていただく場合がございます。)
 高校・大学生は無料。
 (入口で学生証のご提示をいただきます。)

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二―二

NITTEN
日展
 117th since 1907~2024
 第11回 日本美術展覧会
 日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書
 2024年 11月1日(金)～24日(日) 火曜日休館 国立新美術館
 ◆主催：公益社団法人日展 ◆後援：文化庁/東京都 ◆観覧時間：午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
 ◆入場料：一般 1,400円(1,200円) ※(1)申込用紙20名以上料金、消費税別。 ※(2)学生証は、ただし、入口で学生証のご提示をいただく場合がございます。
 お問い合わせ：03-6812-9921(公開中) ※チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展」ウェブサイト <https://nitten.or.jp/> でご確認ください。

第11回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ

・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

(入場無料) 於国立新美術館 3階 講堂 ※変更となる場合があります
 ※各日、講堂前にて整理券をお配りします。(30分前)

開催日	講堂でのイベント
11月2日(土)	午後1時30分～3時30分 (日本画) ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者(大臣賞・都知事賞・会員賞・特選) 映像による作品解説 今年度審査員
11月4日(月・振)	午後1時30分～3時30分 (洋画) ※途中10分休憩 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月9日(土)	午後1時30分～3時30分 (彫刻) ※途中10分休憩 第11回展の見どころ 今年度審査員 知って得する彫刻散歩―鹿見島編 〓 西郷、大久保像の秘密と仏教の救世主の話〓 野添浩一 彫刻女子「コスチュームの表現と着色について」語る 中村優子・野原昌代・堀内有子・安田陽子
11月16日(土)	午後1時30分～3時30分 (工芸美術) ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者(大臣賞・都知事賞・会員賞・特選) 今年度審査員が選ぶ新鋭作品 今年度審査員
11月23日(土・祝)	午後1時30分～3時30分 (書) ※途中10分休憩 シンポジウム「日展の書」 有岡郊屋・佐々木宏遠・永守蒼穹・日比野博風・吉澤大淳・岩村節庵 作品解説「書」 木村通子・森嶋隆鳳・綿引滔天

「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品(彫刻一部の作品)に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

第十一回日展 審査員・係

第四科（工芸美術） 審査員 一九名

第十一回 日展《係》

（外部審査員）

（〇印＝係主任）

第十一回 日展 審査員 九五名

（外部審査員）

（外部審査員）

（副理事長） 佐藤 哲

（理事） 町田 博文

（理事） 春山 文典

第一科（日本画）

（理事） 伊東正次

第一科（日本画） 審査員 一九名

（理事） 大谷 喜男

（理事） 桑原 紀子

第二科（洋画）

（理事） 野田夕希

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

第三科（彫刻）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

第五科（書）

（外部審査員）

（副理事長） 土屋 禮一

（副理事長） 神戶 峰男

（副理事長） 土橋 靖子

第四科（工芸美術）

（副理事長） 齋藤 尤鶴

（理事） 渡辺 信喜

（理事） 大谷 喜男

（理事） 桑原 紀子

第三科（彫刻）

（理事） 野田夕希

（会 員） 手塚 恒治

（会 員） 齋藤 尤鶴

（会 員） 永守 蒼穹

第五科（書）

（会 員） 日比野博鳳

（准会員） 猪熊 佳子

（准会員） 宮瀬 富之

（准会員） 佐々木宏遠

第四科（工芸美術）

（准会員） 吉澤大淳

（准会員） 松永 敏

（准会員） 山田 朝彦

（准会員） 野田 杏苑

第五科（書）

（准会員） 有岡 郊崖

第二科（洋画） 審査員 一九名

（外部審査員）

（外部審査員）

第五科（書）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

第五科（書）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

第五科（書）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

（外部審査員）

第五科（書）

（外部審査員）

わくわくワークショップ

対象 小・中学生とその保護者
(参加費無料・保護者は入場券を各自用意下さい)

実施日程

11月3日・10日・17日(日曜日)
午前10時30分～日本画・洋画・書
午後2時～彫刻・工芸美術
※各教室約2時間

申込受付

ハガキかFAXまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(第2希望まで)を明記の上お申込み下さい。申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。

(受付締切10/25必着)

受付人数 各教室10組(20名程度)

☆日展作家が直接指導します。

☆参加費無料

【お申込み・お問合せ】

〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局展覧会係
(03-3882315701)
(03-3882310453)
(E-mail event@niten.or.jp)

第11回日展開催中のイベント

わくわく鑑賞会

―出品作家達とゆづり日展を鑑賞したい方に―

開催日程 11月11日(月)・18日(月)

定員 各回10～15名

参加費 1名 五、五〇〇円

(入場料、昼食、テキスト他)

時間 10時30分集合、16時10分解散(昼食つき)

※日本画と書まで、各科の担当作家がご案内します。(主要作品のみ。)

※予約制(詳細は事務局までお問い合わせ下さい。)

●作品解説会

―一人だっけ参加したい!―
出品作家のお話に耳を傾けてみませんか?

三三解説会

―個人の方―

時間 午後1時30分～(30分程度)

定員 各部門20名(5部門)

※参加は無料ですが各自入場券をご用意下さい。

※予約制(当日受付あり)

※土・日・祝・初日を除く

サークルなどグループの方

※予約制。事務局まで相談ください。

※学校行事、部活動など

※予約制。事務局まで相談ください。

※学校行事、部活動など

※予約制。事務局まで相談ください。

第11回日展行事日程(予定)

―係会関係―

10月20日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(洋画・工芸美術)

10月21日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(書)

10月24日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(日本画・彫刻)

10月31日(木)

○出陳者内覧

○大臣賞等受賞者発表

○出陳者懇親会

第1科 KKRホテル東京

第2科 上野精養軒

第3科 リーガロイヤルホテル東京

第4科 東天紅

第5科 ザ・プリンスパークタワー東京

11月1日(金)

○第11回日展開会式

11月14日(木)

○第11回日展授賞式

(国立新美術館講堂)

11月24日(日)

○第11回日展閉会

《第11回日展チケット情報》

前売ペアチケット

通常、一般一枚一、二〇〇円(当日

一、四〇〇円)の前売券を、ペアで

ご購入の場合、二、二〇〇円に。通常

の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・

日展公式サイトのみ

トワイライトチケット



時間限定の入場券

観覧時間 午後4時～6時

一般一枚 五〇〇円

※学生(高校生・大学生)は無料。入口

で学生証をご提示いただきます。

※会場窓口のみ販売

第11回日展前売券販売店のご案内

(10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・CNプレイガイ

ド・ローソンチケット・ファミ

リーマート店内Famiポート、他

デパート(友の会)

東武・丸広

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター・

ヨークカルチャーセンター、他

他に画材店・画廊・書道用品店な

ども取り扱います。

日展公式サイトでも販売して

科学と技術と芸術と

尾池 和夫

二〇二四年八月、静岡市で日本美術教育学会の集まりがあり、「科学と技術と芸術と」と題して九〇分の記念講演を行った。その準備をしている中で、私の小学校三年生のときのことを思い出していた。高知県の中山間地にある複式授業の小さな小学校に私が入学したのは昭和二二（一九四七）年春であった。戦後の教育で先生たちが張り切っている時代であり、絵を描くことも複式授業の中で盛んで、地域の大会でも薔薇を描いて賞を貰った。高知市立第六小学校に転校して「お池の鯰」とニツクネームを頂戴した。京都大学で私は地震学の研究者の道を選んだので、ますますニツクネームが定着することとなった。

三年の担任は新任の先生で油絵を描いていた。ある日嬉しそうに話してくれたのが「私の絵が日展に入りました」ということだった。わからないまま「日展」の存在を知ることになった。先生には今でも年賀状を送る。年賀状に必ず自分で干支を描く。

私立土佐中学校に入っても、美術の先生は日展を目指して赤と緑の抽象画を描いていた。同級生に後に美術の分野で知られることになった合田佐和子や田島征彦と田島征三の双子の兄弟もいた。私は京都大学へ、芸術とはまったく関

係のない分野を専門としたが、同級生の田島征彦が京都にいたので、ときどき会って影響を受けた。

音楽を聴いたり、自分も唄ってみたり、美術展覧会に出かけたりする機会が京都には多く、いろいろの文化に触れながら、地震という自然現象を研究対象としていた。フィールドワークの手法を採ったおかげで、自然の景観や地球上の生態系に直に触れる機会が多く、今にして思えば、アートに触れる機会があったからこそ、自然の美しさを脳に刻み込むことができていたのかもしれない。

人生後半になって、さまざまな分野の研究者と議論する機会ができたとき、自然の美しさという視点に立って議論をする基本が私にはできていた。大学を退職して国際高等研究所で「天地人研究会」を続けた。自然と人間のことを東洋の思想の視点で議論し『天地人』という本を出版した。福島第一原子力発電所の事故調査の政府委員を務めたり、京都市立芸術大学法人化の有識者会議の座長を務めて移転の方向性を決めたり、京都精華大学の理事を務めて、芸術関係の議論に参加する機会も多かった。その後、京都造形芸術大学（現在の京都芸術大学）の学長になったために、ますます芸術の分野に接することとなった。

芸術系の大学で「書」を取り入れていない大学が多いのが私は不満であった。今年三月まで学長を務めた静岡県立大学には杭迫柏樹さんに「遊」という字を大書してもらった。現代にもっとも必要な一字であると私は確信している。日本美術教育学会の参加者の皆さんに、若い世代

をいかにして真の意味で遊ばせるかということ話を話した。遊びが人類にとっては本質的なことで、すべての分野に必要であるということをも美術教育では伝えることができる。学校ではそれが今衰退していて未来が明るくない。

日展は日本最大の総合美術展覧会であり、長きにわたり常に日本の美術界をリードし続けてきた公募展であると自らを誇っている。その誇りを元に、芸術教育を定着させ、芸術があらゆる分野に、そして世界の平和に貢献できるように、会員の皆さんに努力をお願いしたい。

尾池 和夫（おいけ かずお）



一九四〇年東京で生まれ高知で育った。土佐高校から京都大学理学部地球物理学科卒業。理学博士。京都大学防災研究所助手、同助教授、理学部教授、理学研究科長、同大副学長、第二十四代総長。その後、国際高等研究所所長、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）学長、静岡県立大学学長を歴任した。

京都大学名誉教授、日本地震学会名誉会員、俳人協会名誉会員。氷室俳句会主宰。

日展の美術鑑賞教育に期待

清水 康友

昨今はコロナ禍も沈静化し、我々の日常も以前の状況に戻り、海外からの旅行者は前にも増して多くなった。彼等は日本各地を巡り様々に楽しんでいるが、最近では上野の東京都美術館や六本木の国立新美術館の公募展会場でもその姿を見かける。日本人もパリのルーヴル美術館やマドリッドのプラド美術館、ニューヨークのMOMA等を訪れるが、特別な目的の旅行以外一般の人の多くは、ツアーの中で有名美術館を訪れたという事が多い。海外の旅行者が、日本の公募美術展を見に来るのは意外であった。恐らく彼等にとって訪問国のナショナルギャラリーに行くのは、当然の事なのであろう。これは海外に於ける美術鑑賞の歴史と習慣、教育によるものと思われる、日本との違いを痛感させられる。

残念乍ら、日本で美術館ギャラリーを訪れてみようと思う一般人の数はさ程多くない。それは仕事の忙しい事、美術鑑賞への不慣れに加え、作品の見方がわからないからの理由が多い。そう言いながらも、メディアで話題となった展覧会には、何時間も並んでまでも見に行っている。時々「美術は自分の感性で、自由に好きに見れば良いのだ」と言う人がいる。基本的にはその通りだが、鑑賞の初心者はこの様に突き放されると取り付く島がなくなり、作品を見る事を諦めかねない。作品の制作に技術レベルの差がある様に、鑑賞者にもレベルの違いがあ

るので。美術鑑賞は一点の作品と向き合い、それをどの様に読み解き何が潜んでいるかを探り出す、見る者と作品による知的ゲームと言える。

日展は会期中に様々なイベントを催すが、中でもここ数年行っている小中高生を対象にした「わくわくワークショップ『手紙を書こう』」は、子供達を鑑賞に導く第一歩として意義あるものだと思う。ワークショップには参加者に制作体験をさせるものが多いが、この取り組みでは子供達が日展を見て、作品への感想や疑問質問等を文章にして手紙という形式で作者と遣り取りする。直接のトークでは時間の問題が生じるため、これはユニークで面白い企画である。

日本には国公立・私立の美術館が多数あるが、教育担当の専門学芸員のいる館はまだ少ない。ギャラリートークを美術館ボランティアが行う事もある。海外の主要美術館では、企画担当や学術担当の学芸員同様教育担当の学芸員（エデュケーター）は重要な存在である。美術館は作品を展示、収集、保管、研究する他に、教育機関である事を忘れてはならない。



また我が国には多くの美術・芸術系の大学があるが、その大半は美術の制作者と教員養成を目的としている。小中学校の美術の授業では時間の制限もあり、実技が中心で作品鑑賞の授業は少ない。しかし現実には美術家になる人より、鑑賞者となる人の数の方が圧倒的に多いのである。こうした実技教育と鑑

賞教育の不均衡が、成人してからの美術鑑賞への障壁となつてはいないだろうか。優れた眼を持った鑑賞者がいなければ、優れた美術家が育たないのは自明の理なのである。

子供達が美術に親しみ、美術鑑賞が特別な事ではなく習慣となる様導くのは、家庭、学校、美術館によるもので、その一端を日展がワークショップとして担っている事は評価される。これは日展が日本で最大の公募美術展であり、五つの部門を備えて質の高い作品を展覧しているからこそ可能な事と言える。

美術評論に携わり見る側に立つ者として、鑑賞者に関しては常に気になる所である。日展のこうした取り組みは、将来の優れた鑑賞者育成のため、是非とも継続して頂きたいと思う。

清水 康友（しみず やすとも）



一九五四年東京都生まれ。早稲田大学教育学部社会科卒業。東洋史、東洋美術史を学ぶ。

美術倶楽部代表、全国農業組合連合会（J A）美術委嘱コンサルタント、損保ジャパン美術財団奨励賞展推薦委員、淑徳大学エクステンションコース講師、富山国際現代美術展シンポジウムメインパネリスト、取手市主催「明日へと繋ぐ展」監修、市川市美術品購入審査会会長等を歴任。美術評論家として執筆、展覧会審査、講演活動を行う。現在、国際美術評論家連盟会員。

第十一回日展 各科審査員より

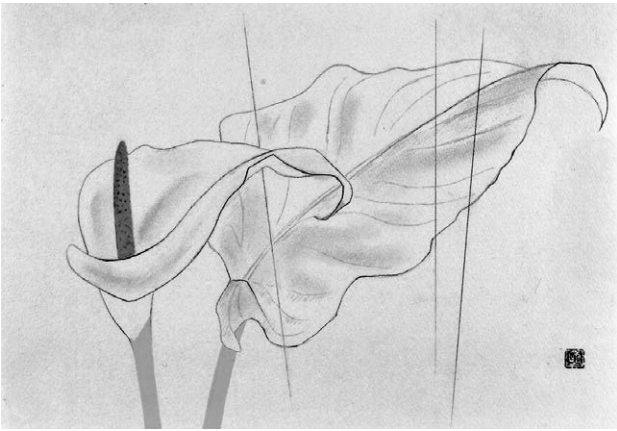
第十一回日展審査にあたって

手塚恒治（第一科 会員・審査員）

私の絵のテーマの根底には、理解のあった、そして応援してくれた、父と母への思いがあります。そのことが、私に描き続けていく力を与えてくれています。

また、日展に出品してから、門下生として指導していただいた奥田元宋先生、大学での加山又造先生、遡ると、中学・高校やデッサン教室などの……すぐれた先生にめぐり会い、身近に接し得たことは、大きな財産となっています。

今回の日展審査にあたっては、自分の感性を感じ、審査に臨みたいと思います。描き込むことも大事ですが、それ以上に、個人的で新鮮な作品を見逃さず、とも考えています。さらに、魅力的な日本画科の展示空間になるよう努力していくことも、審査員としての重要な役目だと思います。



変わりゆくもの、変わらないこと

佐藤俊介（第一科 会員・審査員）

若い頃「変わりゆくものの中にある普遍性」が面白く感じ主題にすることが多かったのですが、いつの頃からか「変わらないもの」そのものに惹かれるようになっていました。歳を経て

「変わりゆくもの」の変わら

なさ」を知ったのかもしれませんが。

ところで今年の元旦、私の住む地は大きな災害に見舞われました。特に自身のルートでもありライフワークとして取材に通う奥能登は、その風景が大きく変わりました。報道ではなくこの目で確かめそして描かねばと赴くも、懐かしく誇りに感じていた風景の余りに変わり果てた姿に絶句。無常ということ知らされ、今ほとと描けないと思えました。一方で、これに乗れ越えた姿を予感させられるような能登特有の変わらない雰囲気に一筋の希望を感じました。

審査では、膨大な数の出品作を拝見する機会を得られます。「変わりゆく新鮮さ」と「変わらない強さを」備えた作品に出会えることを期待しつつ、奮起する日々です。



森に魅せられて

猪熊佳子（第一科 準会員・審査員）

私はこれまで、森や山を巡り、水や風の息吹、動植物の命の輝きに触れながらこの世界に共に生きる全ての命を見つめ描いてきました。自然環境は日々変化し、優しくてのどかだけではない厳しい世界が訪れているのを感じています。愛おしい自然を描く事はこの上ない喜びです。日本画顔料の奥深い美しさに魅了され、表現の可能性を求め、視覚で語ることの喜びと難しさを感じながら作品に取り組んでいます。学生時代から出品し始め、多くの先生方や先輩方に見守られ描き続けてきました。

長く描く側だから作品と向き合ってきましたので、この度初めて審査員を拝命し重責に戸惑っておりましたが、先輩から作品の見方や感じ方が豊かになり視野も広がるとアドバイスを受け少し心が落ち着きました。多くの出品者の方々のそれぞれの作品に真摯に向き合い想いと情熱を受け取れるよう鑑審査に臨みたいと思っています。



五感

大谷喜男 (第二科 会員・審査員)

初めて応募した一九七〇年代、日展二科に入選する厳しさがあり、入選落選を繰り返してました。高校生の時に油絵を始めましたが、それまでの素描や水彩画と違い、油絵具(画材)に馴染むまで苦労しました。今なおその難しさを感じています。と同時に、油彩画の奥深さを感じるようになりました。

絵を描くことは、自己に内蔵する得体の知れない宙を、より深く記憶に留めようとして、絵画によって具現化しようとしているのかもしれない。同じテーマを追究して描き続けますが、時が経つと慣れもあり感動も薄れます。自分のアンテナが何かを察するよう五感に気を配ることだと思えます。

近年、画材、技法が多様化しています。限られた時間の中で鑑査する難しさと責任の重さを感じています。審査員として適正な鑑査が行われるように務めたいと思います。



第十一回日展の審査によせて

熊谷有展 (第二科 会員・審査員)

この度、五回目の審査員を務めさせて頂くこととなりました。

毎回感じる点として、大変な重責と心得ております。一点の作品の良

いところを決して見落とす事の無いよう、公平公正な審査にあたらせて頂きます。その為にもまずは自身の作品制作に精進をし、審査員の名に恥じる事のない、自身が納得出来る作品の完成を目指します。

そして、思いは審査のその先へと続き若い世代が魅力を感じる日展であってほしいと色々と考えます。

近年、絵を描く若者が減少している状況ですが、当方が勤務している大学の芸術学部では教職員の努力や様々な取り組みにより、受験生が増加しています。若い世代に発信力のある明日の日展へとつなげていきますよう、微力ながら努力してまいりたいと存じます。



初審査

二宮弘一 (第二科 準会員・審査員)

この度、第十一回日展におきまして審査員という大役を仰せつかり、この身に余る榮譽に感激の次第でございます。日展初入選以来幾度となく谷に落ち、瀬を渡り、峠を越えたりと、息つく暇もなく絵を描き続けてまいりました。これまでこのようにして来られたのも、背中を押してくれた先生方、ともに研鑽しあった同志、それにいつも応援してくれている近き方々のお陰と、心の底より感謝の念にたえません。未だ道は雲の中、ただ信じる一筋の光りを頼りにこれからもこの道を歩んでいく所存でございます。

初めての審査員として審査に向かわせていただきます。審査主任並びに先輩の先生方と共に審査をするにあたり、身の引き締まる思いでいっばいです。また、この重責に襟を正し第十一回日展が魅力ある展覧会になるように頑張り抜く所存でございます。



朝のひと時に思う

嶋畑 貢 (第三科 会員・審査員)

早朝、先祖から受け継いだ僅かばかりの畑へ野菜の収穫に出かけます。アトリエは早くも三十度越えのサウナ状態、何と暑いこと。胡瓜・茄子・トマト等々…。この猛暑の中、必死に生き抜いている野菜たちには只々頭が下がります。この日の野菜は早速朝の食卓に並びました。これらの野菜は二つとして同じ形のもがなく実に個性的で味わい深い。どこか彫刻との共通点を感じます。まさに自然が作り上げた彫刻そのものです。

私が彫刻を始めてから半世紀、時は流れるものでなく積み重ねるものであると言いますが、果たして私にはどれほどの積み上げがあったのかと自問自答しています。この度の第十一回日展の審査員を拝命した今、しっかりと自分と向き合い、
・新しいものを見つけようとしているか
・今日の自分に満足していないか
・マンネリ化した技で制作していないか等々
今の自分を振り返り決意を新たに審査に臨みたいと思います。



第十一回日展審査にあたって

横野仁一 (第三科 会員・審査員)



今年の夏も常態化した猛暑日が続く、線状降水帯の発生による水害や地震など、度重なる自然災害を目の当たりにして、「自然界」にテーマを求めてきた私は、その脅威にあらためて「人は自然に生かされている」という思いを強くしました。

今回、第三科の審査員を仰せ付かり、自分の制作姿勢を振り返って今更ながら緊張を強いられました。

日展の彫刻はその草創期より常に具象表現の多様性を重視して互いを尊重しながら切磋琢磨してきた経緯があると思います。先達から受け継がれてきた伝統ある表現を再確認することも大切な要素かと思えます。

応募されてくる作品は、それぞれに練達した技量のもと、内面から湧き出た思いを形にしたものであろうと思います。様々な苦労や思いが込められた作品に真摯に向き合い、厳正かつ公平な審査を心掛けていきたいと思えます。

新審査員として

前田真里 (第三科 準会員・審査員)

大学二年時、運動部で真っ黒に日焼けした私も美術科の専攻を選ぶ時となりました。いくつもの選択肢に迷う中「基礎の乏しい自分が短い大学期間で何かを得るには、厳しいと定評の彫塑室しかない」という直感に導かれ、古い木造校舎一階廊下突き当りの彫塑室へと向かいました。軋む扉を思い切って開くと、そこには情熱の恩師と熱血の先輩方がいらつしやいました。

こうして私の彫刻人生が始まり、大学期間では飽き足らずもつと何かを得ようと今に至っております。あれから歳月経ちますが、粘土を付ける毎に細い心棒から立体感が増していく快感には毎回新鮮な感動を覚えます。

このたび、歴史ある日展の審査員を拝命いたしました。初めて審査する立場となり、この重責を全うできるものかと日に日に身のすくむ思いをしております。諸先生方、諸先輩方の沢山の教えと、彫刻を愛する想いを胸に誠心誠意務めさせていただきます。



作品制作にあたって

叶 道夫 (第四科 会員・審査員)



最近の工芸界では、これまでの工芸観を変えようとする展覧会が各地の美術館において開催されているように思います。

そのような中で日展における工芸とは、多種多様な工芸素材を用いて、素材の特性を充分に生かした技法、技術で自身の美を追求し表現した、現代のあらゆる空間を創造する作品であると考えます。私自身、作品制作にあたり「観・感・創」すなわち自然をよく観察し、自身の美を発見し、その感動を焼き物の素材である土、釉薬を用いて創造制作する事を心がけております。

新たな可能性、特殊性を秘めた美しい感動を観覧者に与える意欲溢れる存在感のある作品が多数出品される事を期待致しております。

第十一回日展にあたって

安藤 工 (第四科 会員・審査員)

今年度の第十一回日展審査員を拝命致し責任の重さを感じています。

私は四十年前に高校の授業で初めて日展を観覧しました。スケールの大きい会場に、光輝く芸術作品に触れ心を打たれ、感動したことを昨日のこのように覚えております。

その日を機に、私は日展に憧れを抱き陶芸の道に入り毎年挑戦し続けてきました。入選して喜んだり、落選して悔しい想いをし、何を作ったらいいのか悩み苦しみ、日展の出品を通して多くの事を学びました。私は明治時代から続く国内最大級の総合美術展として、多くの人々を惹きつけてきた日展に出品していることを誇りに思っています。

今回、審査員を務めるにあたり、私が四十年前に衝撃を受けたような、次世代の若者や多くの人々の琴線に触れる素晴らしい作品に出逢える事を期待すると共に私自身も真摯に誠実に審査に取り組んで参りたいと考えています。



日展審査にあたり

西 緑 (第四科 準会員・審査員)



この度、第十一回日展の審査員として初めて委嘱を受け、その重責に不安と緊張でいっぱいです。

大学時代、恩師の所属していた日展の工芸美術を知り、今まで観たこともない作品群に感動したことを覚えております。特に染めの色、織の表現の奥深さに魅せられ、約半世紀『続けること』だけを目標に制作して参りました。その中心に公募展を置いたことで、少しずつですが成長できたと感じています。まずは客観的に自分の作品と向き合う機会となりました。そして何より諸先生方のご指導が有難く、また仲間と刺激し合うことも大きな糧になりました。

工芸は、多種多様な素材と技術を生かし、作家の想いを表現しています。分野が多く、審査は難しいと思いますが、作品に込められた想いを受け止められるよう、真摯な姿勢で一つ一つの作品に対峙いたします。自分が審査されるといいう気持ちで審査に臨みたいと思います。

第十一回日展審査にあたって

有岡郷崖 (第五科 会員・審査員)

日展という場は、私にとつては特別な意味を持つている。書を志した頃より、日展に入選することを夢みて筆を握り続けてきた。このようなことから初入選の時の喜びは、印象的に記憶の中に残っている。以後これまで、日展への出品を重ねてきましたが、一年間の集大成としての出品作すべてが常に自身満足できるものではなく、その都度反省点ばかりで次はどうしようかと思ひ巡らせる日々を繰り返すばかりです。今回審査員という任にあたっては、出品作一つ一つに様々な思いをもって書魂のすべてが投影された作を鑑別するということは容易なことではない。特に、徐々に絞りこむ段階では息が詰まるほどの緊張感を味わうことでしょう。そうした状況の中、書の様多様性と書風を認めつつも格調高く、充実した完成度を示す作を、自らの審美眼を信じながら鑑審査にあたりたいと思っております。



第十一回日展審査員を拝命して

岩村節慮 (第五科 準会員・審査員)

四度目の挑戦でようやく手にした初入選の大きな喜びを伝えたとき、「二度ではまぐれかもしれない」と言つて父は褒めてくれませんでした。慢心を戒めたあの言葉から三十数年、この度、審査員という大役を賜りました。師匠はもとより、これまでご指導いただいた諸先輩方のお陰と、心より感謝致しております。

日展入選を目標に、その年の集大成として制作した作品には、それぞれ込められた思いがあるはず。それらを踏まえて、限られた時間の中で優劣を付けなければならぬ審査は、容易なものではないでしょう。その課せられた重責を日毎に強く感じております。

多様な表現の中から、伝統に立脚した生命力溢れる力作を選べるよう、諸先輩方に学びながら、謙虚に真摯に臨んで参りたいと思っております。



日展の重み

佐井麗雪 (第五科 準会員・審査員)

私が初出品したのは昭和五十七年。以来日展は私の中で常に憧れであり究極の目標でありました。まさに各出品作家が自らの命を懸け精魂を込め、鍛錬の限りを尽くして仕上げた最高級の作品が集まる空間であると言つてよいでしょう。

『書』の魅力は、なんといっても『線』の表現に尽きると思ひます。もちろん造形も重要な要素ではありますが、観る者を魅了するのはやはり線の生命力と言えるのではないのでしょうか。一本の流れる線の中に自分の想いや生きざまを投影し表現する、これこそが書の醍醐味であると確信しております。今回審査にあたられる諸先輩、先生方に学びながら書にこもる気魄、いのち、高い完成度を見落とすことなく、それぞれの作品に真摯に向き合い素直な気持ちで審査に臨みたいと思ひます。



（夏休み一日ART体験）

第10回 **ワンデイアートレポート** **Monday Art** レポート

連日の猛暑の中、日展会館のイベントスペースで、「第19回 Monday Art」が開催されました。

今年は初参加の方も多く、大人と子供、あわせて231名の方が参加してくださいました。作品展もたくさんの方が並び、スポットライトを受けて輝く自分の作品に、驚きと喜びの参加者の表情が印象的でした。

作品展の様子は公式サイト（子ども日展ページ）で行い、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

《指導作家》

7月21日 彫刻

吉岡 徹 中原篤徳 廣川政和
寺山三佳 鈴木紹陶武
（オブザーバー） 山田朝彦
（サポーター） 堀内有子 安田陽子
境野里香

7月27日 工芸美術（金工・七宝）

小島泰明 勝 孝 田中照一
中村三喜雄 古瀬政弘 石黒美男
手銭吾郎 林 香君

7月28日 洋画

田辺知治 桑原富一 佐藤祐治
田中里奈 前田 潤 茅野吉孝
（オブザーバー） 佐藤 哲

8月3日 書

井上清雅 綿引滔天 植松龍祥
岩井秀樹

（オブザーバー） 高木聖雨
（サポーター） 尾花太虚 角田大塚

滑田耀齋 松浦龍坡

8月4日 日本画

亀山祐介 岩田壮平 川田恭子
能島浜江

（オブザーバー） 米谷清和
（サポーター） 野田夕希 安田敦夫

櫻井伸浩

【ご協力いただきました】

株式会社栄豊齋、株式会社吉祥、株式会社玉蘭堂、株式会社呉竹、株式会社ケーエス、株式会社光雲堂、株式会社東海丸二陶芸、株式会社平助筆復古堂、株式会社墨運堂、東洋額装株式会社



賛助会員制度《日展パトナーズ》
（掲載希望者のみ 令和6年8月末現在）

●個人

青木晃子様 東 晋一郎様
新井演子様 飯田真未様
石崎國夫様 井谷善恵様
井上道守様 今田功一様
今村忠司様 岩田 薫様
奥田節子様 角井 博様
梶山純子様 兼重勇希様
菊池和久様 栗原直子様
呉 祐輔様 黒田浩平様
児玉安司様 小山信一様
近藤禎男様 坂本美賀子様
佐川かおる様 佐藤大悟様
澤井和行様 高木和美様
高木寛史様 田頭益美様
高橋千笑様 竹尾明子様
竹本葉子様 田中宏欣様
土屋礼央様 寺岡宏高様
中室里恵様 西田俊通様
西村潤帰様 西村友子様
野田裕一様 藤田理恵子様
藤本真之様 堀 稲子様
宮島幸男様 村里 暁様
森寫順子様 吉見次郎様

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス様
株式会社 大垣共立銀行様
株式会社 玉蘭堂様
謙慎書道会様
一般社団法人 光風会様
公益社団法人 創玄書道会様
株式会社 タカラクリエイト様
株式会社 高山草月堂様
株式会社 千葉銀行様
株式会社 筑波銀行様
T&Tパトナーズ法律事務所様
株式会社 帝国ホテル様
一般社団法人 東光会様
東洋額装 株式会社様
株式会社 西文明堂様
公益社団法人 日本書芸院様
ニューカラー写真印刷 株式会社様
株式会社 原汲古堂様
一般財団法人 ビオトピア財団様
福井素鳳堂様
有限会社 みなせ筆本舗様
一般財団法人 桃園学園様
株式会社 谷中田美術様
菱三印刷 株式会社様
株式会社 和光様

日展ゆかりの
美術館
散策
第18回

全国各地の美術館の中から日展作家ゆかりの美術館を関係者の紹介文を添えて少しずつご案内いたします。是非、日展作家の名作との出会いをお楽しみください。

奥田元宋・小由女美術館

茶室も造られました。

日本画家・奥田元宋、人形作家・奥田小由女の二人の名を冠した奥田元宋・小由女美術館は、ジャンルの違う平面作品と立体作品とが響き合う美術館として、広島県三次市に開館しました。二〇〇六年四月、新しく完成した美術館の開館記念展として「響き合う二つの芸術奥田元宋と奥田小由女展」が開催されました。

第四科 工芸美術 顧問 奥田 小由女



奥田元宋《秋羅細瀑》(平成12年第32回日展出品作)

建築家の柳澤孝彦氏により設計され、建築面積三、五〇〇㎡、地上三階の規模で、常設展示室、企画展示室、収蔵庫、レストランなどを配置し、別棟に

元宋の作品の中には月が度々描かれるので、「日本で月が一番美しく見える美術館」と銘打って、建物の中間部に大きな池が配置され、満月の日にはその水面に月が映り、天空にも満月が輝く構想になっており、美術館も満月の夜は九時まで開館、ロビーコンサートも楽しまれています。美術館の外観も元宋の日展特選受賞作「待月」のなだらかな山の形を模して建築されています。

自然の中に身を置いて繰り返し写生をし、風景との対話を重ねながら、四季折々の自然の姿を時には荒々しく、時には静かに自らの筆で表現してきた奥田元宋。心に宿る情感を「ひとがたに託し、自然との共生や、母子の情愛などをテーマに、華やかで安らぎに満ちた作品を祈りと共に世に問い続ける奥田小由女。

私達二人の故郷となる三次市からの要望と、広島県(前広島県知事)からの強力な要請があった、三次市に一括して多くの作品を寄贈することになりました。そして建設が実現したのが奥田元宋・小由女美術館です。美術館には、二人の数々の日展出品作の他に、超大作の「紅嶺」、「白嶂」などもあり、二つの文化勲章が飾られた美術館は、子供達も一緒に多くの方々に親しまれ、愛されています。



この美術館は三次市に支援され、サポートメンバーや大勢のボランティア夢スタッフの方々にも支えられています。「響き合う二つの芸術」を皆様に楽しんでいただけたら幸いです。



奥田小由女《海からの生還》(平成29年改組新第4回日展出品作)





奥田元宋《炎王図》
(昭和53年第10回日展出品作)

○奥田元宋
一九一二年、三次市吉舎町に生まれ、日影館中学（現・広島県立日影館高等学校）を卒業後上京し、日本画家・児玉希望の内弟子として本格的に画家生活に入る。人物画や花鳥画を中心に制作していたが、一九四四年戦況悪化の為郷里に疎開し、自然の美しさに感動し風景画に開眼する。
一九四九年第五回日展「待月」、二度目の特選受賞。
一九六二年第五回日展「磐梯」文部大臣賞受賞。
一九六三年、前年の日展文部大臣賞受賞作「磐梯」により日本芸術院賞を受賞する。
一九七三年、日本芸術院会員に任命される。
一九八一年、宮中歌会始の召人へ選ばれる。御題は「音」、「彩れる秋写さむと山峽に木葉時雨の音をききをり」を詠進する。文人画家と呼ばれる。
横浜の根岸山大聖院（真言宗）に赤い龍の天井画を制作。同寺ゆかりの亡妻龍子を供養する。天井画の龍のまわりの金箔は工芸家の小由女が制作する。
文化功労者に顕彰される。
一九八四年、文化勲章受章。
一九九六年、京都慈照寺（銀閣寺）の庫裏大玄関および弄清亭の障壁画四十二面完成。
二〇〇三年二月十五日、多くの人に惜しまれつつ逝去。



奥田小由女《月の別れ》(平成17年) 2m

○奥田小由女
一九三六年大阪府堺市に生まれ、三歳で広島県三次市吉舎に移る（旧姓・川井小由女）。
元宋と同窓の日影館高等学校（現・広島県立日影館高等学校）卒業後、上京して紅実会人形研究所に入所。人形の基礎を学ぶ。
一九七二年第四回日展「或るページ」特選受賞。
一九七四年第六回日展「風」特選受賞。この頃の純白の抽象的な造形が「白の時代」と高く評価される。
一九七六年、奥田元宋と結婚。生活が一変し多忙の為「白の時代」を続ける事が出来なくなり、手造りの色胡粉による彩色の作品に移行する。
一九九〇年、前年の日展出品作「炎心」により日本芸術院賞を受賞する。
一九八八年第二十回日展「海の詩」文部大臣賞受賞。
一九九八年、日本芸術院会員に任命される。
二〇〇六年、元宋が逝去した年の日展出品作「月の別れ」を二m余りの大作に二年がかりで制作して奥田元宋・小由女美術館に設置する。
二〇〇八年、文化功労者に顕彰される。
二〇二〇年、文化勲章受章。



奥田元宋・小由女美術館

〒728-0023

広島県三次市東酒屋10453番地6

TEL 0824 (65) 0010

【アクセス】

JR広島駅から芸備線 三次駅より路線バス
又は車（タクシー）で約10分

直行バス（高速バス）

広島バスセンター（9：20発）→

美術館前（11：05着）

美術館前（16：43発）→

広島バスセンター（18：30着）

中国自動車道 三次ICより車で約3分

委員会委員新人事

令和六年七月一九日開催理事会において、左記委員が選考された。

日展運営委員会

日本画 福田 千恵
洋画 佐藤 哲
彫刻 山田 朝彦
工芸美術 春山 文典
書 高木 聖雨

能登半島地震被災地域の

支援について

このたびは株式会社パソナグループ・代表取締役グループ代表南部靖之様より、令和六年能登半島地震の被災地域にお住まいの作家を支援されたいとお考えから、日展に対し多額の寄附金をいただきました。

日展理事会では、ご意向に沿って、石川県及び富山県に在住の日展作家（一八四名）に、支援金としてお届けいたしましたのでご報告いたします。

パソナグループ代表南部様からの温かいご支援に、改めて深く感謝申し上げます。

刊行物のご案内

第11回日展作品集

- 定価 三、四〇〇円（税込）
- 令和6年11月1日発行予定
- 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
- 別冊 作家本人による作品解説、釈文（書）
- 諸資料
- A4判変型
- オールカラー 約一五〇頁
- 表紙 土屋禮一・中山忠彦・神戸峰男・宮田亮平・真神巍堂（出品作・予定）

第11回日展図録

（五部門五分冊）

- 定価 各二、四〇〇円（税込）
- 令和6年11月6日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目錄を収録
- （作家名・作品題名の読み仮名付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
- 審査所感、授賞理由ほか諸資料
- A4判変型

第一科『日展の日本画』

- オールカラー 約六五頁
- 表紙 土屋禮一（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』

- オールカラー 約一五〇頁
- 表紙 中山忠彦（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』

- オールカラー 約六〇頁
- 表紙 神戸峰男（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』

- オールカラー 約一二〇頁
- 表紙 宮田亮平（出品作・予定）

第五科『日展の書』

- 全会員・審査員・篆刻はカラー、準会員・無鑑査・特選・一般入選はモノクロ 約二二〇頁
- 表紙 真神巍堂（出品作・予定）

※ご注文方法等、詳細はホームページにてお知らせします。

表紙

無鉛油薬「王鳥の如く」

二〇二〇年（令和二年）

改組新第七回日展

46×35×22cm

武腰敏昭

（一九四〇～二〇二二）

左の先生方が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

松田 安生先生（彫刻・会員） 6.7.30
西山 松生先生（洋画・会員） 6.8.30
吉崎 道治先生（洋画・会員） 6.9.22

編集後記

新型感染症のコロナとの共存を模索する中で、この夏も過去に例を見ない命の危険を伴う暑さや、インフラが停止するほどの局地的な豪雨が連日の事となりました。

そのような状況下でしたが、本号は、尾池和夫氏、清水康友氏両先生による「特別寄稿」、各科三名による「第十一回日展各科審査員より」、四年ぶりの「日展ゆかりの美術館散策」は、「奥田元宋・小由女美術館」について奥田小由女先生ご自身に執筆をいただきました。

先生方には、多様な観点から芸術に対する飽くなき探求の思いを丁寧にお伝えいただきまして、深く感謝申し上げます。

日展ニュースが、鑑賞者と制作者ともに人材の発掘と継承に繋がればと、学びの機会のきっかけになります事を願っております。

（浅見）

編集委員 亀山 祐介 西田 真人

浅見 文紀 前原 喜好

野原 昌代 堀内 秀雄

上原 利丸 村田 好謙

歳森 芳樹 福光 幽石